

2022年5月22日（日）主日朝礼拝説教

『私に従いなさい』井上隆晶牧師

エレミヤ1章4～10節、ヨハネ福音書21章15～22節

①【自分の弱さを知り、更にキリストに似た者となるため】

ガリラヤ湖畔での朝食が終わると、イエス様は口を開いてペトロに「ヨハネの子シモン、この人たち以上にわたしを愛しているか。」(15節)と尋ねられました。「この人たち」というのは他の弟子たちのことです。それは以前ペトロが「たとえ、みんながつまずいても、私はつまずきません。」(マルコ14:29)と言ったからです。しかしこの数時間後にペトロはつまずき、他の弟子たちと同じようにイエス様を裏切り逃げてしまいました。このイエス様の問いかけは、「今でも自分が他の人より優れていると思うか？あなたも同じように弱いのだ。それに気づいたか。」と言っておられるように感じます。そこでペトロは「はい、主よ。私があなただを愛していることは、あなたがご存知です」と答えます。たとえ弱い愛でも、自分がイエス様を慕っているのを、あなたは知って下さっていると、ペトロは答えたのです。ここではもう「私の愛」ではなく、「キリストの愛」を知ったペトロがいます。もはや誇れるのは自分の愛ではなく、キリストの愛だけだと言っているペトロがいます。するとイエス様は「わたしの小羊を飼いなさい」と言われます。それは信者を養いなさいという意味です。プロテスタントでは牧会と言われ、カトリックでは司牧と言われます。この後「わたしの羊の世話をしなさい」「わたしの羊を飼いなさい」と微妙に違ってきます。私は小羊とは弱い立場にいる信者を意味し、羊とはそれ以外の信者を意味しているように感じます。飼うのはみ言葉と聖餐を与えることであり、世話をするのは祈り、関わり続けることだと思います。イエス様は彼を教会の牧者として再びお立てになったのです。牧師や神父にとって必要なことは、自分も他人と同じように弱い者だということを知る事、それでも愛して下さるキリストを知る事、そして自分のしたことを誇らず、キリストがしたことを誇る者であることです。

すると再びイエス様は「ヨハネの子シモン、わたしを愛しているか」と問われました。なぜ二度も同じことを聞かれるのでしょうか。ペトロは一回目と同じ答えをします。するとイエス様は「ヨハネの子シモン、わたしを愛しているか」と三度目も同じ質問をされます。ペトロは悲しくなって「主よ、あなたは何かかもご存じです。わたしがあなたを愛していることを、あなたは良く知っておられます」(17節)と答えます。ペトロはイエス様が自分を信じてくれないと思って悲しくなったと思うのですが、私には一回目の問いとは意味が違うように感じます。二回目と三回目の問いは「ペトロの意志と決意」を聞いておられるように感じるのです。自分が弱い人間であること、それをキリストが受け入れておられること、これが

基本なのですが、そのままで良いのではなく、今は弱いけれども必ずキリストのようになりたい、なるぞ！という決意と意志が必要だと思います。実際、彼は最後はそうなってゆきます。

●日本基督教団の信者でAさんという方がおられます。彼は高機能自閉症という発達障害の当事者です。自分が障害をもっていることに気づかず、幼少期から周りの環境に溶け込めず孤独な日々を過ごします。成人後も挫折を繰り返し、2006年に追い詰められて家を飛び出し、ホームレスを3ヶ月間体験します。そのどん底で彼は教会に行くようになります。その後「特別支援教育」を受け、みちがえるように回復してゆきました。彼は「その人が回復するためにはまず、自分が障害者であるということ、障害をもっているということを受け入れることが大前提です」といいます。私は彼に「教会は神様が罪を赦して、あなたはありのままでもいいよ、とよく言います。だから自分に障害があるということ認めることもしないし、成長することを辞めてしまう人が出てくるのではないのでしょうか。」と質問をしました。すると彼はこう言ったのです。「私たちはみんな神の似姿なので、成長してゆくことが大切だと思います。人間は生きている限り成長すべきです。信徒になったからそれでOKということではないと思います。…私はこれからどんどん成長したいと思います。どん底まで落ちましたから。」

牧師や信徒になったからそれでOKではないのです。キリストの似姿にまで成長しなければなりません。

②【能動的信仰から受け身の信仰へ成長すること】

この後、主はペトロに言われます。「あなたは若い時は、自分で帯を締めて、行きたい所へ行っていた。しかし、年をとると、両手を伸ばして、他の人に帯をしめられ、行きたくないところへ連れていかれる。」(18節)これはペトロがやがて十字架に手を広げられ殉教することを意味しています。「ペトロがどのような死に方で、神の栄光を現すようになるかを示そうとしてイエスはこういわれたのである。」(19節)とあります。彼は逆さ十字架になって死にましたが、その死が神の栄光を現すものとなるというのです。

「行きたい所へ行っていた」信仰のスタイルから「行きたくないところへ行く」という信仰のスタイルに変わるということです。能動から受け身の信仰です。したいことをする信仰から、したくないことをさせられる信仰です。考えてみると、イエス様の生涯もそうでした。奇跡を行うことから無力な者へ、大勢の人が従った時から、皆が散って行く時へ、栄光から十字架の敗北へ、称賛から嘲笑へと向かう道でした。彼と一体である私たちも同じ運命を負います。ペトロは徐々にキリストに似た者になっていきました。

③【人は一人で神に従うものです】

ペトロが振り向くと、イエスの愛しておられた弟子であるヨハネがついてくるの

が見えました。そこでペトロは「主よ、この人はどうなるのでしょうか。」とイエス様に問います。ペトロは自分には苦しみが待っていると言われ、他の人の運命が気になったのです。すると主は、この人が長生きをすることを私が願ったとしても、あなたに何の関係があるのか。「あなたはわたしに従いなさい」と言われました。ペトロとヨハネは二人とも運命が違っていました。ペトロは殉教を、ヨハネはパトモス島に流刑となり、そこで長寿を全うして死にました。私たちも同じです。一人一人神様からいただいた定めが違うのです。神様が用意して下さった仕事と使命を果たすように努力しなければなりません。人は人、自分は自分なのです。横の人や後ろを見るのではなく、前と上を見上げることです。絶えずキリストに聞くのです。「私はどうすべきですか？何をすべきですか？」

●榎本保郎牧師はこのようなことを書いています。「神はアブラハムから妻もロトも一人子イサクも引き離し、神によって一人にさせられた。ヤコブも父母や兄から離れて荒れ野で野宿した時、神に出会った。ヨセフも11人の兄弟から引き離され、ひとりエジプトに売られていったが、そこで神の栄光を見た。モーセもヨブもそうである。ひとりで神の前に立つ、ということを神は私たちに求められる。」
「私たちはひとりになることを恐れる。そして、いつも〈みんな〉を問題にしやすい。〈みんな〉を問題にしている間、私たちは神の山に立つことはできない。…主はペトロに向かって『あなたは私に従ってきなさい』と求められた。私だけがみ言葉に従うことは不安でありさびしい。しかし、み言葉はひとりにならない限り、従うことのできないものである。」

み言葉はたとえ皆に語られていても、いつも「あなた」に語られているのです。イエス様もいつも「それはあなたが言ったことです」と言われたでしょう。あなたも神に答えなければなりません。

●キリストに従うことについて、2世紀のリヨンのエイレナイオスはこう言っています。

「主がご自身について来るように命じたのも、私たちからの奉仕が必要だったからではなく、私たちに救いを与えようとしたからである。救い主について行くことは救いにあずかることであり、光について行くことは光にあずかることだからである。光のうちにある人は、光に照らされ、輝かされるのである。…神は従う人々に、いのちと不滅性と永遠の栄光を分け与えられる。」

箴言に「**神に従う人の道は輝き出る光、進むほどに光は増し、真昼の輝きとなる。**」

(4:18) という言葉があります。キリストに従えば従うほど、その人はキリストの御顔の光を受けてますます輝くようになるというのです。私は洗礼を受けてキリストに従ってから41年目になりますが、悪くなることは何一つありませんでした。悪くなったのは従わなかった時だけです。神に従う人は必ず強くなります。

一人なのに確信があり、一人でも寂しくなく、一人なのに恐れなくなります。皆
さんは家を建てている現場を見て、「この柱は立派だなあ」と感心したことがある
でしょう。建物はその使われている材料が立派で強健なら、強い家が立ちます。
薄いベニアや安いコンクリを用いれば家は弱くなります。キリストという最も確
かで強い材料を使って、自分の人生を建てた人は強く立つことが出来るのです。
キリストとそのみ言葉は倒れず、崩れず、腐らないからです。神の言葉に従って
生きる人は、強健な建物のように決して倒れないでしょう。

「あなたはわたしに従いなさい」という言葉を自分に言われた言葉として聞き、
これからも従っていきたいと思います。